

(80)

氏名(生年月日)	アキ オカ ユウ コ 秋 岡 祐 子
本 籍	
学 位 の 種 類	博士 (医学)
学位授与の番号	乙第1534号
学位授与の日付	平成7年3月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当 (博士の学位論文提出者)
学位論文題目	小児 IgA 腎症にみられる分節性病変の構築 —三次元的立体構築からみた分節性病変の形成と進展過程—
論文審査委員	(主査) 教授 二瓶 宏 (副査) 教授 小林 槇雄, 村木 篁

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕

小児 IgA 腎症の進行にかかわる糸球体硬化の初期像として分節性病変が指摘されている。この病変は係蹄内の病変が係蹄外に拡大し形成されると考えられている。そこで、分節性病変の形成にかかわる係蹄の責任病変を明らかにすることを目的として、分節性病変の構築を三次元的に検討した。

〔方法〕

小児 IgA 腎症15例48分節性病変を対象として連続切片を作製し、分節性病変の構築を光学顕微鏡で観察した。分節性病変を構成する係蹄および管外性病変は、陳旧度順に次のように分類された。係蹄病変は①浸出性病変を含む管内増殖性病変、②メサンギウム細胞増殖、③メサンギウム基質硬化とした。管外性病変は半月体に注目し①細胞性、②細胞線維性、③線維性半月体とした。そして各半月体に連続する癒着部係蹄病変を観察し、半月体の陳旧化に伴う係蹄構築の変化について検討した。

〔結果〕

1. 独立した複数の分節性病変を10.4%の糸球体に認めた。
2. 75.0%の細胞性半月体は管内増殖性病変と連続性をもち、分節性病変の癒着部を構成していた。このうちの80.0%の分節性病変は管内増殖性病変を唯一の係蹄病変としていた。
3. 管外性病変が細胞線維性、線維性半月体へと陳旧化するのに伴い、癒着部係蹄病変は各種病変が混在し

て構成されていた。各病変別の出現頻度では、管内増殖性病変が減少し硬化性病変が増加していたが、管内増殖性病変はなお33.3%の線維性半月体に認められた。

〔考察〕

分節性病変を構成する様々な病変の関わりを把握するため、糸球体立体構築を行い、病変の形成過程を検討した。分節性病変は、管内増殖性病変すなわち急性炎症性変化が管内から管外へ進展し細胞性半月体を形成することにはじまると考えられた。さらに、分節性病変内に繰り返し起こる急性炎症が、分節性病変の拡大、進展を促すことが考えられた。

〔結論〕

分節性病変を形成する初期病変として管内増殖性病変は重要であり、この病変の多発、反復が硬化性変化への進展を促すと考えられた。

論文審査の要旨

成人の IgA 腎症ではメサンギウムの硬化が進展を促すとされているが、小児の IgA 腎症、特に初期像では糸球体係蹄の分節性病変が重要であるとの指摘がある。

本研究では、腎生検組織の連続切片から分節病変の三次元的再構築を試み、病変の部位と半月体の陳旧度から責任病変の検討を行った。小児 IgA 腎症における初期病変としては管内増殖性病変が重要で、この多発、反復が分節性病変を形成し、硬化性病変へ進展することを明らかにした。小児 IgA 腎症が臨床経過だけでなく組織所見でも成人とは異なることを明らかにしただけでなく、腎炎の進展を考える上で一石を投じた、学術的価値のある論文である。

主論文公表誌

小児 IgA 腎症にみられる分節性病変の構築—三次元的立体構築からみた分節性病変の形成と進展過程—

日本腎臓学会誌 第36巻 第9号 973-981頁
(平成6年9月25日発行) 秋岡祐子

副論文公表誌

- 1) 血液透析患者における徐放性バルプロ酸ナトリウムの有効性の検討—血中濃度の変化—。透析会誌 26(11):1677-1681 (1993) 秋岡祐子, 長田道夫, 久保田玲子, 武田優美子, 伊藤克己, 泉 達郎
- 2) Atubular glomeruli. 腎と透析 37(1): 19-24 (1994) 山口 裕, 秋岡祐子

- 3) 嘔吐発作を繰り返し間歇期にも SIADH を伴う重度精神遅滞, 多発奇形を呈する1女児例—周期性 ACTH-ADH 放出症候群との異同を中心に—。脳と発達 26(1):44-49(1994)秋岡祐子, 粟屋 豊, 池中晴美, 福山幸夫
- 4) 高 IgE, IgG₄血症を伴った4q-症候群(介在型欠失)の1例。東女医大誌 63(臨増): 389-393 (1993) 秋岡祐子, 泉 達郎, 福山幸夫
- 5) 熱性けいれん再発予防としてのジアゼパム坐剤の使用方法について。小児臨 45(1): 33-39 (1992) 秋岡祐子, 粟屋 豊, 池中晴美, 福山幸夫